



繪本梅花冰裂



13  
1908  
10止



1303  
10

梅之花春水卷之四

東都 南仙笑楚滿人編述

身拾七齣 止筆語貞操

虎と見て石小豆矢の念力岩ぞもどあまじ獲のごとく俱不裁天の仇を  
秘らふ孝子終は本懐を達せむといふるも一儲も龍次郎子四兵衛  
衛末ハ年來の仇とる哀文太をおさる身とるが免せりとあつて  
長きと入獲ませしうが飲むの大方さうさず禪除が深き情と感佩  
く玄来一刻もたやと飯国とて一子四兵衛は源義房袖衣も  
秀ひが直行公へ人々の志のむとをもあへおげとといふよ。子四兵衛ハ  
龍次郎よむひ私直の是まで町人あつて五斗米は腰をむらひが耕

梅之花春水卷之四





答ふるは、後人の氣をきくは、是が何国の事なれば、  
 志て問ふは、さきバ山子秘藏せし、おまよく、  
 が奈何せしやと。口よりいふ、この裏に、  
 みて、儂よ、小総まで、我持の、  
 と、いふ、別々、  
 と、いふ、中よ、油、  
 向ひ、唐琴、  
 姓名を、  
 の、後人、  
 問ひ、  
 答ふるは、後人の氣をきくは、是が何国の事なれば、  
 志て問ふは、さきバ山子秘藏せし、おまよく、  
 が奈何せしやと。口よりいふ、この裏に、  
 みて、儂よ、小総まで、我持の、  
 と、いふ、別々、  
 と、いふ、中よ、油、  
 向ひ、唐琴、  
 姓名を、  
 の、後人、  
 問ひ、

下総、  
 貴族、  
 勇が、  
 弥市、  
 女、  
 い、  
 は、  
 △、  
 厚、  
 必、









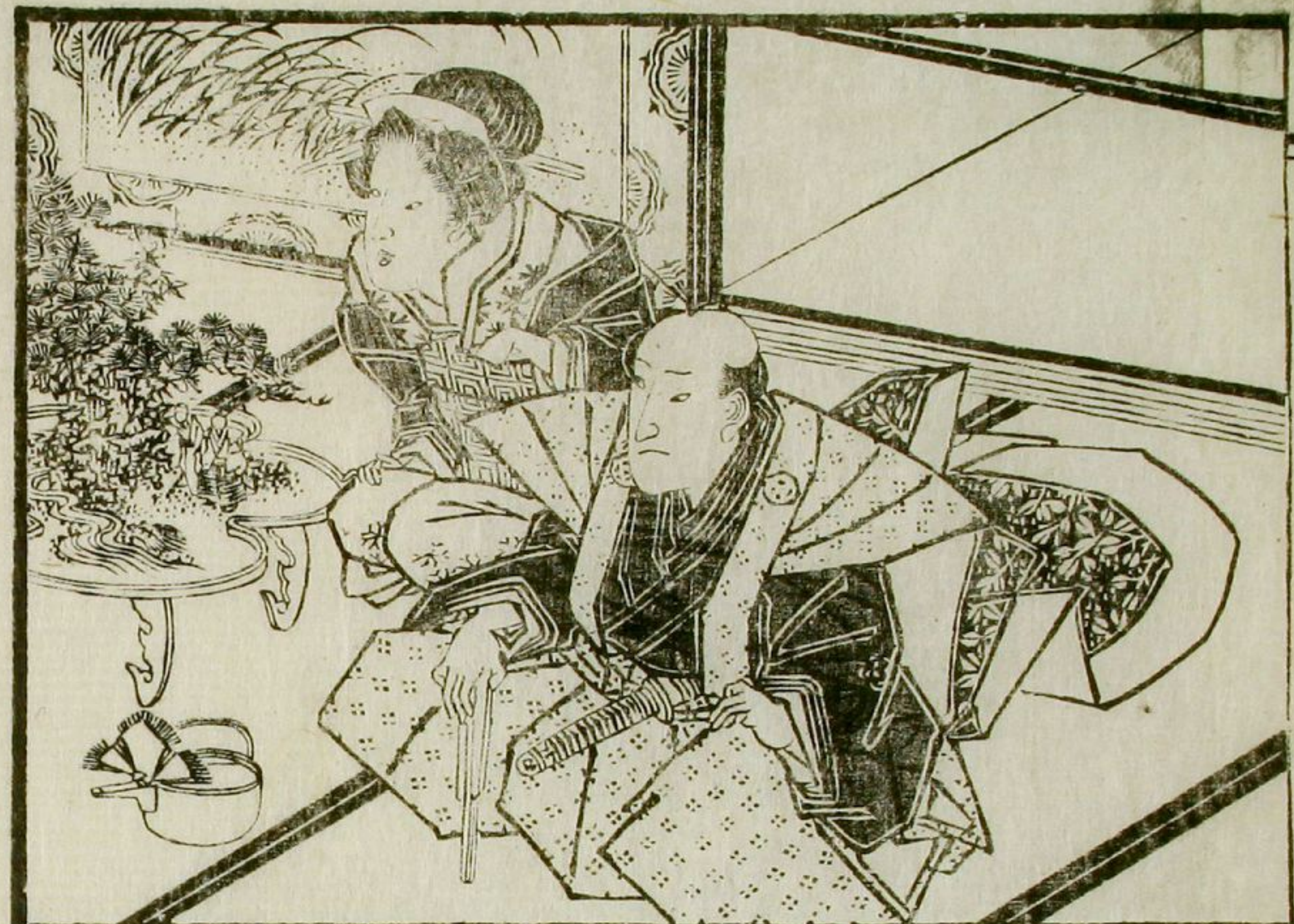


遊はなむいづく怪しく大勢あり。かくめ捕入とひしあくひるは  
 藤原季の内とありてあはれなり。ふ藤原市郎のが正侍の被布は入  
 俵の二百両までとて盗賊入殺しは極つてり。と縣令へ稗の始末を  
 述べていさむをこひし。そのひぬる家根をばて何国へ遊し其後  
 葉をまらつてく経美まきまて更よの初見のまきまきとて是あく龍次  
 藤原の及月のあつりふまきまて稗の顛末書状はまきまて上列する  
 藤原市郎の四子息藤原三郎とぬとからんの方へ送るし。最  
 國とて退のひは信也もまらぬ。まきまてとてまきまてとて黙止  
 ちが察する。今今四方の又傷よあまひの六回送るし。とて  
 まらぬよ老が身とまらぬ。まきまてとてまきまてとてまきまてとて  
 まらぬよ老が身とまらぬ。まきまてとてまきまてとてまきまてとて

て世ふ望みありけまが生輝ゆらとも。剝發してあまねく諸國の  
 靈傷を順尋るまきまてとてまきまてとてまきまてとてまきまてとて  
 むごちもまきまてとてまきまてとてまきまてとてまきまてとて  
 斐文あつて命のうち君はあひまの。せ娘が採のおらま。と  
 のあけ。君の血はより只一返の血。日向が名傍の織の経よりまら  
 かふま。まきまてとてまきまてとてまきまてとてまきまてとて  
 あらま。藤三郎ごのふま。ひ上ハ疑ひをまら。是よりハ鬼平次が  
 悉とまら。日本陸まどげらる。その鬼平次が面体喰ひ。まき  
 が。か能ごん。まきまてとてまきまてとてまきまてとてまきまてとて  
 疑念を散。まきまてとてまきまてとてまきまてとてまきまてとて

最前さきよりの不獲ぶわくのごんぐ真平まへらゆれんとさるとと破やぶて瀧次  
 郎らうも何が儲某そのへ不れをいてさまの皆亡た父ちちへ孝弟ていの心のり子こ  
 呼よびて吾われもあひても大脱だつせりと歎げば体ていは強三さん郎らうも海がおちのて  
 再またひ他法ほつ法ほつ作さくらむひある敵鬼き平へい次じと中んが人ひと骨ほね柄がらハ  
 奈な何なにやと同どうのは他た法ほつ書しよへ年頃ころハ三十じゆ四じゆ百ひやくく眼中ちゆうまるどく  
 乃な文ぶん高たかく骨太たくしゆも一曲きよくあらべう見みる男の形ちともハ  
 心こころとつけく採さいるべといのは強きやう三さん郎らう今いまとハ敵てきの面さてをまら  
 ざりとうど世はまままとう美み少せう年ねんといひ這煙えん系けい入にと澄据じよとサ  
 志し今いま又また其その人ひとハ敵ると子こと外の敵ありといふといふと敵てきもある何  
 といふ澄据じよもさく何呼よびと當あたり何と使りはけ末ハ敵とさる人とさ

りあや運拙ちやくくま中ちゆうハ敵病びやう死しまるり又ハ公府ふハ捕へらるまあらが  
 何なにとせん悲一いつやと不ふ覚かくの泪おしびびと他法ほつ法ほつ所しよ瀧たき次じ郎らうも  
 纏まとめらねる折せ柄がらハ袖助すけハ彼の後日ひ記きを取り来りは体てい牙がおと  
 見みて何まりやと急いそぎ迎えらるふど瀧次じ郎らうハありといふもを物  
 結むすぶ袖衣い波なみとさてしくとまハ危あやまるりけりとその身を変を  
 歎なげひける他た法ほつ同どう心しんハ後の宿妻つまの屍を残しお死しといふはおちいれ  
 といふは瀧たき次じ郎らうも敵とサ二に種しゆまに入いらまい道ハ眼取とらんハ上の  
 志し今いまあり一割ごも早く敵国こく志しけまは残情じやうけまと強三さん郎らうも  
 船ふねと立上たるは強きやう三さん郎らうと君の内運うん目め強きやう三さん郎らうとおち  
 敵てき国こくの心の羨けまの心我われも内男おとこの心敵てき鬼き平へい次じと



からんが首提く故らへま眩る目も  
 あくバ。いりつるりりよりとバ。らんと。  
 口惜し涙よりきく。るま。龍次郎ハ  
 弥三郎をたげます。んとりゆら。  
 何をふけい。く。ふ。め。の。お。か。ん。め。め。  
 凡父兄の敵をお着おの皇天のあ  
 あるのみ。緒天善神の守しを。あ。が。  
 何条を意をたげむ。とい。の。あ。え。  
 や。ひ。水。く。隙。分。と。も。よ。男。を。大。切。の。  
 持。の。と。い。と。町。守。よ。言。ひ。さ。こ。い。  
 必。む。我。国。へ。本。ら。ま。う。が。母。の。か。ま。と。



委しくかへ。り。つ。生。で。愛。よ。居。り  
 とも名残ハ。尽。ト。と。人。が。三。方。へ。ま  
 日。つ。内。く。い。の。う。ち。は。い。り。つ。あ。う。ん。  
 斯くは。後。係。係。係。係。係。の。道。心。を。  
 緒。国。の。聖。場。を。め。ぐ。り。つ。り。本。国  
 下。総。へ。ま。り。り。一。字。の。為。に。い。ま。ま。  
 爰。よ。ま。と。み。く。娘。の。あ。ひ。と。と。あ。ら  
 ひ。が。八。十。余。年。の。毒。と。こ。の。目  
 知。及。大。生。生。と。げ。と。と。ん。  
 身。拾。八。幽。 得。時。梅。残。芳



よう養子とていつか一家を継せざる苗跡の終つていふもあ  
 りたうと俾つて存せし中上るふど貞躬公の如く忠臣の種  
 ふも終つて志操を承り本妻はさうも妾とて忠臣の種  
 のさびしき人を探みあひしふ幸ひ貞躬公の如く忠臣の種  
 時より官仕へせし白糸とよぶる女由緒を承りかかず容後といひ  
 支といひ延うくくぬ世にふてまうも至く貞実なる氣節たるも  
 此春野のよき事とておとけきつて西方の忠臣の種  
 を龍次郎が妻とすくひのけきつて龍次郎もまた難き事とて  
 りかへ早速とひむつとむつと暮しけるかて右の次第を  
 書状のまゝとて東のつ子四重源長言も方告げしつて両箇

奈何とあせしむる事便をばさく然がうらむるまゝ初とて子四  
 重源の原家のまゝ梅波と濁ひ以て活業とて源長言も活業  
 ことごとく足こととてまのて借とつて信を以て交りけしつて隣里  
 實との徳もまづ一村ふ不孝の子とて不孝の如く社内の八道と  
 濁の老を教ひ初とてあまの其風たひは化しけしつて懸念は  
 天晴のこととてつ子四重源も梅と植むる地所を福の小梅源長言  
 長言もつとてつ子四重源も梅と植むる地所を福の小梅源長言  
 のひ其徳もあつて梅堀とてつ子四重源も梅と植むる地所を福  
 源長言もつとてつ子四重源も梅と植むる地所を福の小梅源長言  
 したつてつ子四重源も梅と植むる地所を福の小梅源長言

限りぬ。今も葛原師は梅畑山梅源義経の名の残ることには因縁と  
 あつて三けり密下再生甚結上つて結をの弥三郎の仇鬼平次を頼む  
 おんとは程の越前三国うる敷賀屋とていへる徳備女あまこわへる  
 家の奴僕とていへる心ざりけりひける彼の磨屋の住ゆも  
 今の便のたよりふ安のちへ来り同じく下男とていへる居るひる。  
 斯く彼の景大夫が部下する火車鬼平次又は程の住居をたすま  
 衣服大小を預ふお粉岡澄久馬と改名しての敷賀屋へ来り頼むと  
 いふ傾城の口とて金の根をまたちて運送せしる人皆困大尽と  
 のことなりぬ。日毎は桂山親水綱行漢の趣向も直して今  
 曾ハ古風は百物結の怪物たるを信じていへる頼向末ははるを

図よりと入真あるはびきらんとよらるる新選山女のおとよした  
 文哉と名をよるくあり去る程はま日暮はあまびけき彼の浦  
 糸がなほあつた金細銀燭查のてく并美の頼向敵妓居並び美酒  
 住者山海の味存せたまふとて馬の上をまわ直り大を  
 別更彩送離妓は政とて仕寛とて存くる体所あるあつても馬の  
 うける大江山の酒吞童子は彷彿して先づ一番は當りのハ頼向  
 三味八の味はあましくも後つく扇を膝よわあてて今昔の住居の  
 里もや何甚急とよる傾城屋よ何とよる傾城のありては結り  
 寄が新選亮が三味八の物結りの結り終まで皆あまの  
 袖をわらわも美の三味八の流を掻きしめく在るまは其







毎此春入後共四



梅花春入後共四

十五







和歌集卷之四

作者 南仙笑楚滿人編

画工 柳川重山圖繪

○松浦佐用媛後編全五卷 逆板

○美艷仙女香 另於白くある千り抄り方以  
包四十八文 逆板本氏

文政九年

丙戌正月

良且上梓

江戸

馬喰町二丁目

西村屋與八

小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛

横山町二丁目

大坂屋半藏板

# 群玉堂藏版



大坂心齋橋通博勞町四丁目十七番地

## 岡田茂兵衛

